

亡き母と歩む小児科医の道

淡路島に住んでいた小学4年のとき、阪神・淡路大震災があった。その日から、大好きなお母さんに会えなくなった。涙で何度も枕がびしょしょよになった。散歩しながら一人で泣いた。でも、母娘の間には約束があった。「小児科医になる」。大人になり、それは現実になった。病院で働き、子育てに追われる今、あらためて思う。姿は見えないけど「母の愛をずっと感じていた」と。

旧北淡町(淡路市)出身 子さん(当時33)は「働いたが大崎慶子さん(36)。実家 子育て、勉強熱心で、ようは造船所を営み、3人きよ 笑う母だった」という。1995年1月17日。慶

当時33歳の陽子さん失う

大崎慶子さん(36)

旧北淡町出身



故郷を離れて勤務する大崎慶子さん。今も母に会いたい。会って話したいです。2020年11月、三重県伊賀市上野桑町、岡波総合病院

幼い日の約束果たす

「ずっと愛感じた」存在励みに

震災
26年

子さんは鉄筋の家で寝ていたが、陽子さんは早く起きて近くの母屋に行っていた。激しい揺れで、木造の母屋は全壊。陽子さんは下敷きになった。

父が「あかんかった」と言ったのを覚えている。慶子さんは、がれきの中から出された陽子さんに触れた。「冷たかった。これはお母さんじゃないと思った。これは抜け殻や。どこかにいるのかな、って」

その後、棺に入った母の顔は見なかった。火葬場になった。1人起きて、陽子



大崎陽子さん(大崎慶子さん提供)

にも1人だけ行かなかった。

母がいない生活。夜になると、悲しくて仕方がなくなると、陽子

ライトアップされ、夕闇に浮かび上がる石積み「生」の文字
=16日午後5時46分、宝塚市の武庫川(撮影・斎藤雅志)



再生の願い輝かせ 宝塚・武庫川

未来へ2

1月17日神戸新聞分

自分の中では親子の関係はいつまで経っても変わらない。だが自分が大人に、親に近付くと、子供のときには見えなかったものが自分の中に現れる。それを次の世代へ未来へと引き継いでいてもらいたいものです。

さんが編んでいた写真アルバムを繰り返し開いた。まめだつた陽子さんは写真にたくさんコメントを添えていた。「お母さん、そう言うこと言うよね!」。そう思いながら、近くにいる気がした。自分を見てくれていると思えた。

陽子さんは、慶子さんが低学年の頃から「子どものお医者さん、いいと思うな」と何度も言っていたという。当時は「何?」と思っていたけれど、高学年になるころには小児科医の将来を描くようになる。「お母さんが喜んでやっ

たらなりたいなって」大学は兵庫医科大学(西宮市)に進んだ。小児科医の過酷な勤務などを知り、皮膚科に心が向いたときもある。それでも、悩んだ末に初心に帰った。小児科に入局を決めた研修医2年目の冬。小学校の校庭に埋めてあったタイムカプセルが開けられた。中には、小学6年時につづった手紙が入っていた。「夢がかなってほしいな!。小児科。お医者に向かっている夢なら。だってお母さんと、やくそくしたしね!」。選んだ道に自信

が持た。兵庫医科大学病院や六甲アイランド甲南病院で勤務した後、結婚で移り住んだ三重県伊賀市の岡波総合病院で働いている。2018年には双子の男児を出産した。今、母に勧められた道を歩んでいる。陽子さんはどう思っているだろう。「しめしめ、って思ってるかな」。慶子さんはほろほろ笑いつつ、やがて口を開いた。「関わる子どもたちを元気に笑顔にしたい。小児科医になって良かった」